

K-867

治兵衛館遺跡発掘調査報告書

1999

川西町教育委員会

序

本書は、川西町教育委員会が平成10年度に発掘調査を行なった治兵衛館遺跡の調査成果をまとめたものです。

川西町は、米沢盆地の西端に位置し、治兵衛館遺跡はその北部にあります。昭和29年にこの地に建てられた旧大塚中学校には、「治平の庭」と呼ばれる中庭があり広く地域の人々に親しまれてきました。

発掘調査は、その旧大塚中学校の跡地に川西町立大塚幼稚園が新築移転にするのに伴って実施したもので、この調査では、古墳時代から中近世までの遺跡の存在が確認され、古墳時代の土師器をはじめ貴重な遺物が多数出土しました。

古墳時代、今の川西町域には天神森古墳や下小松古墳群といった多くの古墳が築かましたが、これまでこれらを築いた人たちが生活した遺跡については、ほとんど知られていませんでした。今回の調査によって当時の生活の一部が明らかになるなど重要な所見を得ることができました。

本書が、今後地域史研究の一助となり、また広く文化財の保護にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にたずさわれた方々、協力いただいた方々に厚くお礼を申し上げ序文といたします。

平成11年3月

川西町教育委員会

教育長 高橋 勉

例　　言

- 1 本書は平成10年度に川西町教育委員会が実施した、治兵衛館遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成10年度に川西町教育委員会が実施する大塚幼稚園建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 調査体制は次の通りである。

調査主体者 川西町教育委員会 教育長 高橋 勉
発掘担当者 川西町教育委員会 文化遺跡係長 藤田 有宣
調査員 川西町教育委員会 文化財専門員 斎藤 敏明
調査補助員 八巻 理枝
調査参加者 鈴木仙助 小方瑞樹 小方圭子 藤沢基子 安部悦子 松沢みつよ
金子三次 加藤昭一 安部でん 江口正志 栗田竹二 奥村茂二
佐藤 保 金田東亮 和田てつ 井上 保 情野富男 小野二男
平 秀夫 山口章二 渡部せい 青木正昭
整理参加者 長沢恵美 長沢友子
調査事務局 川西町教育委員会 社会教育課長 竹田 利雄
調査協力 社団法人東置賜シルバー人材センター
川西町文化財保護協会
藤島建設株式会社

- 4 本書に掲載した造構実測図は、斎藤敏明、八巻理枝、小方瑞樹、小方圭子が、遺物実測図は斎藤、八巻がそれぞれ分担して作成したものを斎藤、八巻がトレースし、写真は斎藤が撮影した。
- 5 本文の執筆は斎藤が行なった。
- 6 本報告書に収録した遺物は川西町教育委員会に保管してある。

凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は以下の通りである。

S I ……堅穴住居跡
S D ……溝 跡
S E ……井 戸 跡
S K ……土 壁
S P ……柱 穴

2 挿図中の方位は磁北を示す。

3 揖図の縮尺は、遺物は1/3（石臼のみ1/6）とし、遺構は各図にスケールと縮小率を付して示した。

4 遺物の断面の表示は次の通りとした。

土師器…白ヌキ
須恵器…黒ベタ
陶磁器…ア ミ
石製品…斜 線

目 次

I 遺跡の位置と環境	7
II 調査に至るまでの経緯	7
III 調査の経過	9
IV 調査の成果	9
1 堅穴住居跡	10
2 溝 跡	25
3 井 戸 跡	28
4 土 壁	28
5 柱 穴	31
6 そ の 他	31
V ま と め	35

表

第1表 出土遺物計測表	36
-------------------	----

挿 図

第1図 周辺の遺跡	8
第2図 遺構配置図	11
第3図 SI 01遺構実測図	13
第4図 SI 01出土遺物実測図①	14
第5図 SI 01出土遺物実測図②	15
第6図 SI 02遺構実測図	16
第7図 SI 02出土遺物実測図	17
第8図 SI 03遺構実測図	19
第9図 SI 03カマド付近実測図	20
第10図 SI 03出土遺物実測図	21

第11図	SI 04、SI 05遺構実測図	22
第12図	SI 06、SI 07遺構実測図	23
第13図	SI 05、SI 07出土遺物実測図	24
第14図	SD断面図	26
第15図	SDSD出土遺物実測図	27
第16図	SE01、SE02、SX01遺構実測図、SE02出土遺物実測図	29
第17図	SK01～SK08遺構実測図	30
第18図	SP出土遺物実測図	32
第19図	遺構外出土遺物実測図	33
第20図	石製遺物実測図	34

図 版

図版1	治兵衛館遺跡遠景・調査前状況	39
図版2	遺溝確認	40
図版3	堀跡・掘跡土層断面	41
図版4	SI 01 遺物出土状況・土層断面・貯藏穴・排水溝	42
図版5	SI 02 遺物出土状況・地床炉・排水溝・遺物出土状況	43
図版6	SI 03 土層断面・貯藏穴・遺物出土状況	44
図版7	SI 03 カマド・土層断面	45
図版8	SI 04 SI05 SI05貯藏穴	46
図版9	SI 06 土層断面	47
図版10	SI 07 土層断面・遺物出土状況	48
図版11	SD01・SD01土層断面・SD02・SD04土層断面・ SX01土層断面・SX01・SK03・SK03土層断面	49
図版12	完掘状況・調査風景	50
図版13	出土遺物（1～11）	51
図版14	出土遺物（12～20）	52
図版15	出土遺物（21～29）	53
図版16	出土遺物（30～37）	54
図版17	出土遺物（38～43）	55
図版18	出土遺物（44～62）	56
図版19	出土遺物（63～65）	57

I 遺跡の位置と環境

米沢盆地は、山形県の南部、置賜地域の中心をなす盆地で米沢市、南陽市、東置賜郡高畠町と川西町の2市2町の平野部からなり、福島県との県境となる吾妻連峰を源とする最上川（松川）の上流域にある。1997年の2市2町の人口は約18万人で、同年の県内人口にしめる比率は14.3%である。

治兵衛館遺跡は、山形県東置賜郡川西町大字大塚字元宿にあり、米沢盆地の北西部、盆地を北流してきた松川が長井盆地へ流れ出る標高約207mの河岸段丘上に立地する。遺跡の西側100mには松川の支流元宿川が北流し、北1kmで松川に注ぐ。

現在、周辺は米沢盆地の交通の要衝となっており、遺跡の北西3kmの地点では宮城と新潟を結ぶ国道113号線と米沢と東根を結ぶ国道287号線が交差し、そのすぐ西方にはJR米坂線と山形鉄道フランク長井線の乗換駅となる今泉駅がある。

周辺の関係する遺跡としては、遺跡の北方2km、松川の対岸の南陽市域となる丘陵中に古墳と考えられる埴丘が9基存在する経塙山が、その北東1kmほどどの範囲には同様の埴丘の存在が確認されている稲荷山、童樹山、天王山がある。遺跡の北西方向の長井市域では古墳時代中期から後期の小型円墳群である河井山古墳群が知られる。

川西町域では、古墳時代前期に築造されたと考えられる天神森古墳が遺跡の南5kmに、同じく南西に3kmほど離れた眺山丘陵上には前方後円墳19基を含む総数約200基からなる下小松古墳群がある。古墳時代の集落遺跡としては、多量の土師器が出土する龍藏北遺跡や古墳時代後期の土師器が出土しているカノウ塙遺跡がある。

奈良平安時代の遺跡としては、一時期置賜郡衙が置かれたと考えられている道伝遺跡が南西2.5kmにあり、近年、同時期の筏地業を施した建物が見つかった太夫小屋1遺跡が南5.5kmにある。

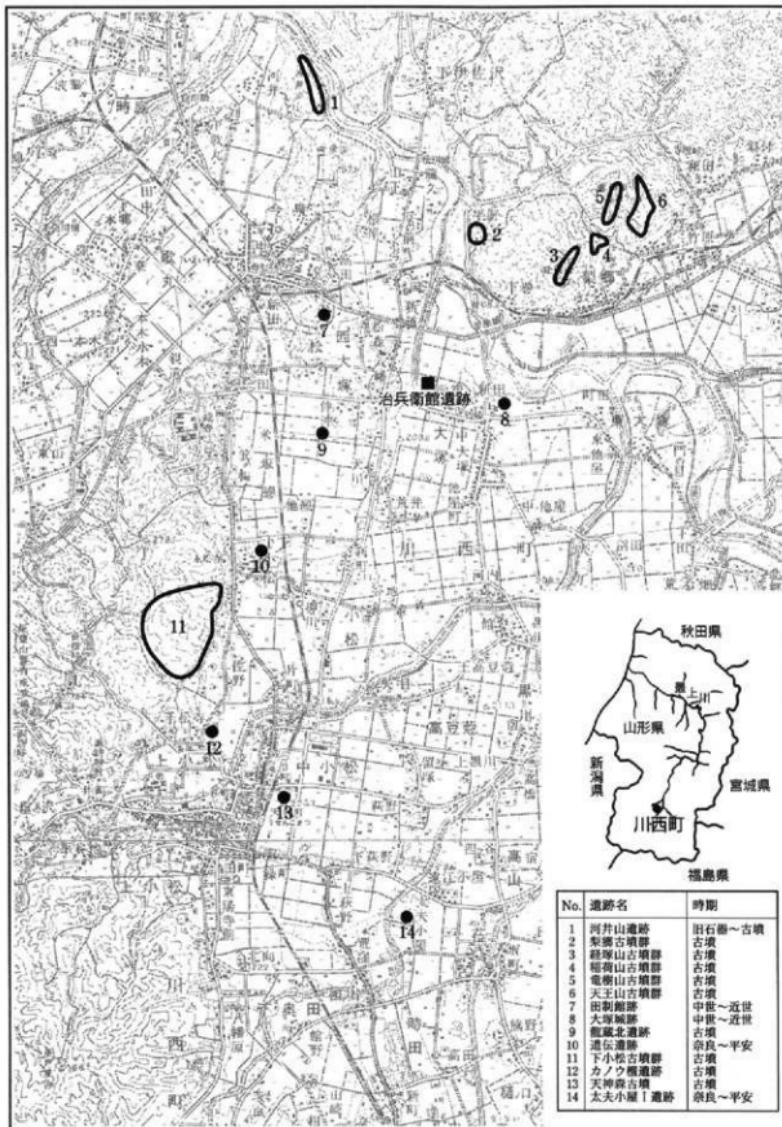
中世以降には鎌倉期の築城といわれる大塚城を中心に、大塚地区だけでも24の城館址があるとされる。治兵衛館もその一つで、大塚城の出城であったとされている。

II 調査に至るまでの経緯

治兵衛館は、戦国期に那須治兵衛により築城された館跡とされる周知の遺跡である。

明治期より学校用地とされ、昭和20年には大塚村立大塚中学校が建設された。その後平成8年3月、町内の中学校の統合により大塚中学校は閉校となった。

中学校跡地が川西町立大塚幼稚園の新築移転用地となたため、平成10年4月に幼稚園整備事業担当部局である川西町教育委員会内で工事施行箇所における埋蔵文化財についての協議があり、建設予定地内に12箇所の試掘溝を設け遺跡の範囲確認調査を行なったところ、建築予定地のほぼ全域より古代から中世にかけての遺構もしくは遺物が検出されたため、建設予定地内約2,100m²の発掘調査を行なうこととなった。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 50,000)

その後平成10年6月15日より同年7月31日までの日程で発掘調査を行ない、整理作業を平成10年8月1日から同年12月7日まで行なった。

III 調査の経過

調査は梅雨時にも関わらず連日天候に恵まれ順調に推移した。調査区は隣接する大塚小学校から望むことができ、調査期間中は小学校の児童が教師に引率されてしばしば見学に訪れた。調査の経過を以下にまとめておく。

- 6月15日 この日より発掘調査に着手する。重機にて表土剥離開始。
- 18日 表土剥離終了。並行して遺構確認を行なう。
- 22日 遺構確認状況の写真撮影。遺構の掘り下げを始める。
- 23日 グリッド杭の設定終了。
- 26日 住居跡(SI01)の掘り下げを始める。この頃隣接する大塚小学校の児童が連日見学にくる。
- 7月9日 遺構全体図($S=1/40$)の作成を始める。
- 7月10日 大塚小学校児童が発掘調査体験
- 7月24日 現地説明会。参加者は地元の方を中心に約70人。
- 7月31日 調査終了。現場撤収。

IV 調査の成果

本調査では、古墳時代から中近世にかけての遺構と遺物が確認されている。調査区の西側には古墳時代の遺構が、中央部には奈良平安時代の遺構が比較的まとまりを持ち、中近世と思われる遺構は調査区東側にややまとまりを持つものの、時期の判別の困難な遺構も多い。本稿では遺構の種別ごとに分けて報告する。なお、グリッドは $10m \times 10m$ のメッシュを調査区全域に被せ、北から南にA～Dのアルファベットを、西から東に1～7の数字を付した。調査区における位置は(アルファベット) - (数字)で表記している。

1 穹穴住居跡

1号住居跡 (SI 01) 第3図～第5図

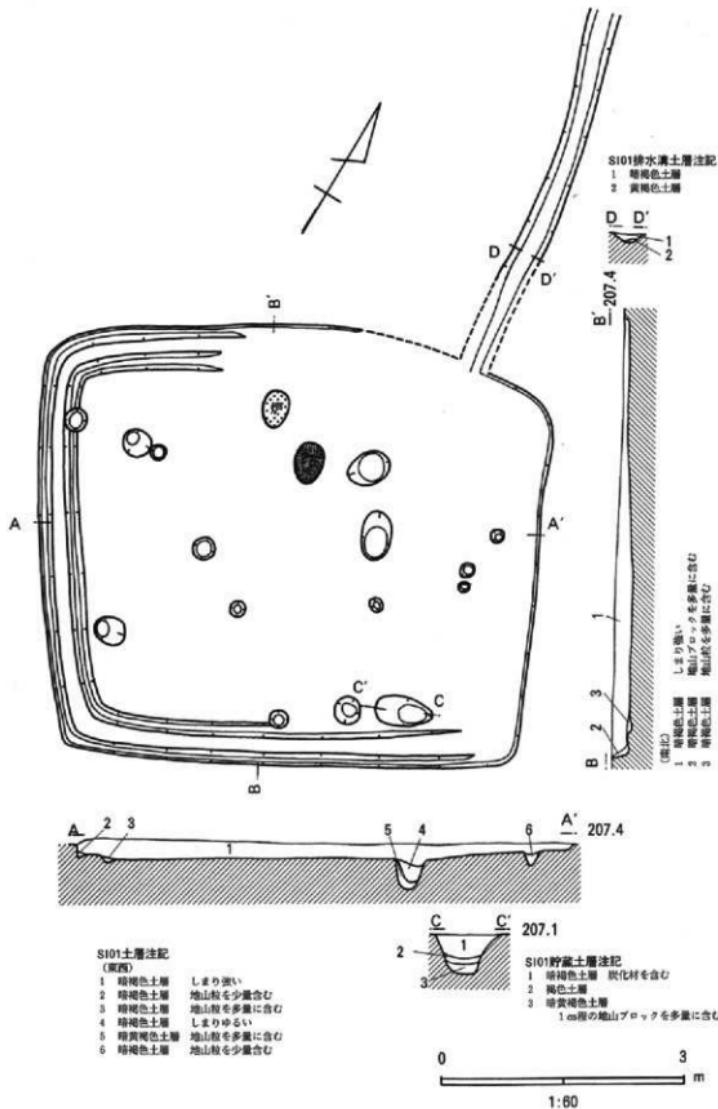
B-1・2 グリッドから検出された。長軸6.45m、短軸5.80mで主軸方位はN-27° -Wの長方形である。確認面からの深さは最大で25cmであり、壁体の立ち上がりは北西面を除いて明瞭である。住居内には周溝がめぐり、西から南東にかけては外周する溝の内側に溝が周り、結果的に二重に溝が作られている。立て替えの可能性は否定できないが、積極的な根拠にも乏しい。外側周溝の北隅より最大幅45cm、深さが最大で12cmの排水溝が北に延びており住居壁から5mまで確認することができた。床面は地山整形で中央から北西にかけてが周囲より高くなっている。この中心に50cm×40cm程の範囲が楕円形に焼けた地床炉がある。柱穴は規模の小さなもののが十数箇所確認できるが、主柱穴は判然としない。東隅に75cm×30cmの平面が楕円形を呈し床面からの深さが50cm程の土壌があり、出土遺物はないものの貯蔵穴と考えられる。遺物は内側の溝の内側で床面から10cmほど上位のレベルまでの覆土中から多量の土師器片が出土しているが、際立って集中する箇所ではなく小片が広範囲に散在する状況である。土師器は壺、坏が中心である。壺では口縁部が直立するもの(5)とくの字状を呈するもの(1、2、3、4)、体部が丸みを帯びたもの(3、4、5)とやや長胴化の傾向にあるもの(1、2)といったバラエティがある。調整は外面は縦方向のハケメが主で、胴下半部にミガキが施されているもの(4)もある。坏は口縁の内側に稜が認められるもの(12、14)と椀状のもの(13、15、16)の2タイプが認められ、後者は、黄褐色で調整が観察できないもの(13、16)と赤褐色で内外面とも丁寧に磨かれたもの(15)に分けられる。いずれも丸底で、外面にヘラ描きの×印がある。この他に壺と思われる底部(8)、土玉(10、11)などがある。また他より上位のレベルから須恵器の坏片が數片(17、18)出土しており、埋没過程での混入と考えられる。図化ができなかったものとしては口縁部が広く開口する鉢などがあり、これら図化不能の遺物の総量は20.84kgである。

2号住居跡 (SI 02) 第6図、第7図

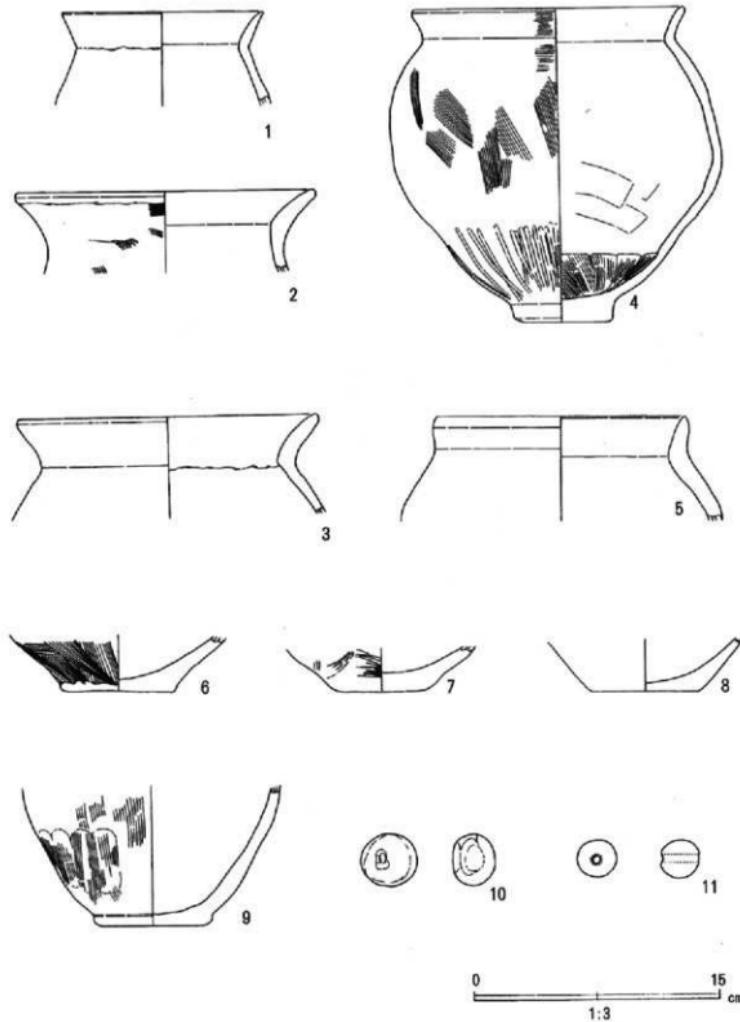
A-2、B-2 グリッドより検出された。長軸6.00m、短軸5.80mの正方形に近い方形で、主軸方位はN-12° -Wである。確認面からの深さは最大で約30cmあり、壁体は西面ではほぼ垂直に立ち上がる。壁周溝はごく浅いが、その内側に北東で大きく弧を描く排水溝が巡り、南北では両者が溝を共有している。排水溝は北西角から住居外へ延びており、壁体から北西に6mまで検出できた。住居外の排水溝は幅15cmで、ほぼ直線である。住居床面は地山整形で中央部がやや高く、周囲に広がるほど低くなり、その比高差は最大で8cmである。中央部やや北寄りに円形に被熱し窪んだ地床炉がある。付近の床面の直上では部分的に炭



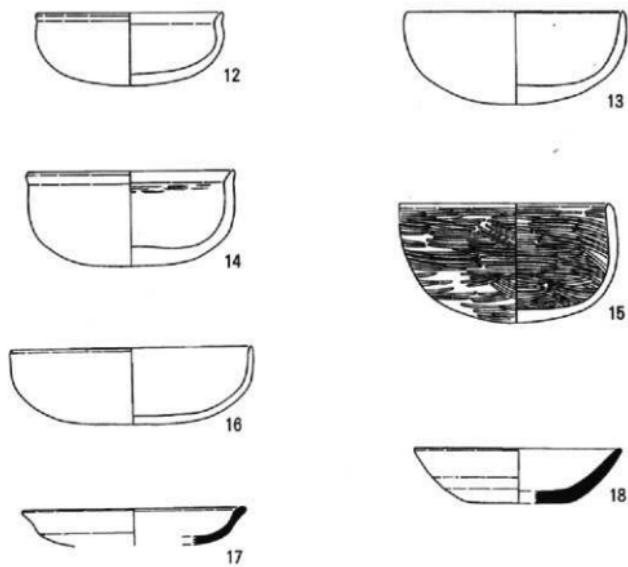
第2図 遺構配図



第3図 SI01遺構実測図

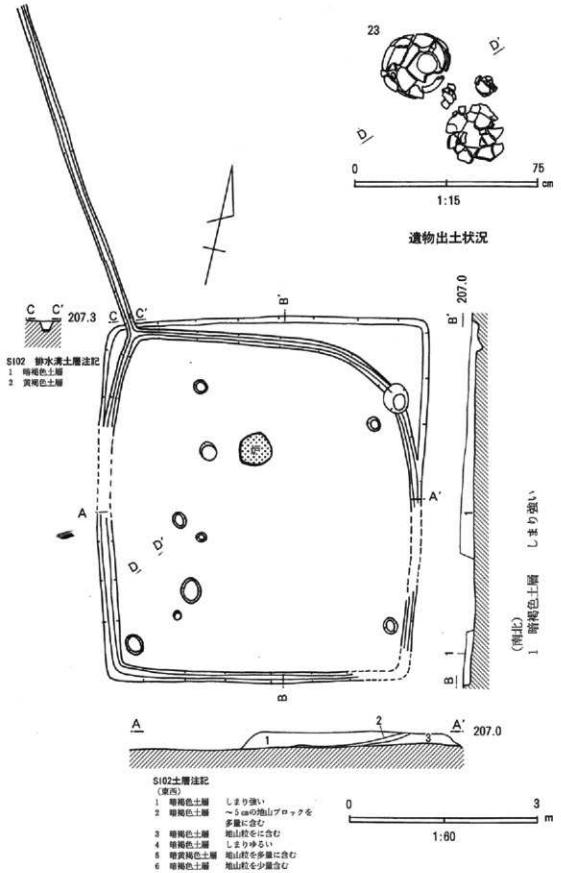


第4図 SI 01出土遺物実測図①

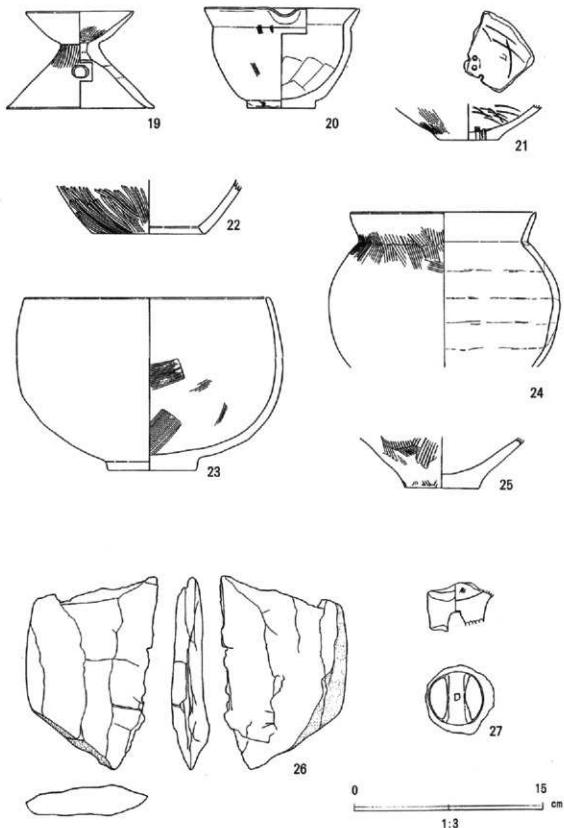


第5図 SI01出土遺物実測図②

化材が確認できた。SI01と同様、規模の小さな柱穴は数ヶ所確認できるが主柱穴は判然としない。遺物は土師器を中心である。器種には、甕、壺、器台、鉢、片口鉢、瓶が確認できる。甕(24)は「く」の字状の口縁に球形の胴部を持つもので、外面の上半はハケメ調整されている。壺(25)はハケメ調整された下半部があり、同じ個体と思われる頸部の小破片は内外面とも赤彩されている。器台(19)は小皿状の受け部に円錐台状の脚部がつき3箇所に円形の透かし孔がある。鉢は球形の胴部を持つ大型のもの(23)と小型で片口が付するもの(20)とがあり、後者は器台と同様の他に比べて精緻な胎土で造りも丁寧である。瓶は底部が大きく開くもの(22)、小孔が多数穿かれたもの(21)がある。また、甕と近似する底部が二股に分かれ横断面が半月形の2本の脚が下方へ延びる異形の土師器(27)がある。2片が接合した用途不明の石(26)が他の遺物と同レベルで出土している。なお、図化不能な土器片は土師器の甕が殆どで総量は4.51kgである。



第6図 SI 02遺構実測図



第7図 SI 02出土遺物実測図

3号住居跡(SI 03) 第8図～第10図

A-2、A-3グリッドより検出された。長軸3.50m、短軸3.40mの正方形に近い方形で、南面や東よりにカマドを持つ。主軸方位は、S-11°-Eで、北面の入り口が想定できる。確認面から床面までの深さは最大で36cmである。床面は、一度荒掘りした後に客土して整形しており、部分的に硬化している。東西方向には水平であるが南北では北側が高く南が低い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁周溝は確認できなかった。主柱穴は北側の2本を検出することができたが、南側に対応するものが見当らず、壁ぎわの柱穴がこれに相当するのかもしれない。カマドは、南面の東寄りに黄褐色土で構築されている。内側はやや掘り窪めてあり支脚に転用したと考えられる甕(33)が伏せた状態で出土した。外部に延びる顯著な煙道は確認することができず、やや掘り窪められているにすぎない。カマドの西側に大きさ35cm×35cm、深さ38cmの土壤があり、中から須恵器坏(28)がほぼ完形で出土している。貯蔵穴と考えられる。出土遺物は土師器の甕や鉢、須恵器坏、不明鉄製品がある。土師器の甕は、口縁部がやや外反するチーリップ形を呈し、底部外面に網代痕が残るもの(33)と口縁部が大きく開き胴部は長く縱方向のハケメ調整されているもの(34)などがある。須恵器の坏は、平底のもの(28、29、30)と高台をもつものの(31、32)があり、後者はやや高い高台に浅く外反する坏部をもつもの(31)、低い高台に深く直線的な坏部を持つもの(32)がある。いづれの高台も坏部整形後に付されたものである。坏部の切り離しには回転糸切りのものほかに回転ヘラ切りのものがある。他に円盤状の不明鉄製品(37)がある。図化不能な出土土器片の総量は1.29kgである。

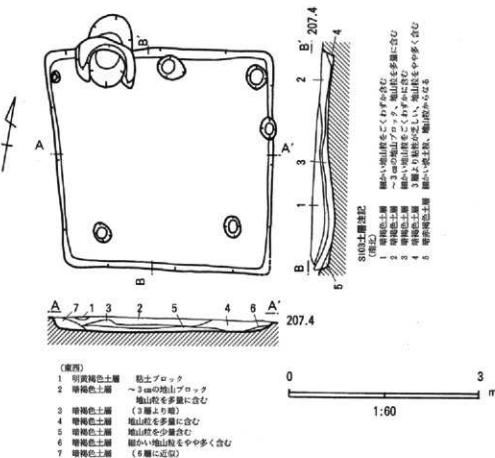
4号住居跡(SI 04) 第9図

A-2、A-3グリッドから検出された。南北角のみの検出で規模は不明である。南東角がSI05と切り合っている。断面の観察ではどちらが先行するのか把握できなかった。確認面から床面までの深さは10cm程度である。床面は地山の整形であり、壁周溝は巡らないようだ。

主柱穴は判然としない。出土遺物は皆無である。

5号住居跡(SI 05) 第11図

A-3グリッドから検出された。南半のみの検出である。東西軸が4.70mあり、仮に南北軸を主軸とすると主軸方位はN-2°-Wとはほぼ磁北を向く。確認面から床面までの深さは平均して6cmほどである。床面は地山整形で壁周溝は巡らない。住居内の南東隅に平面で

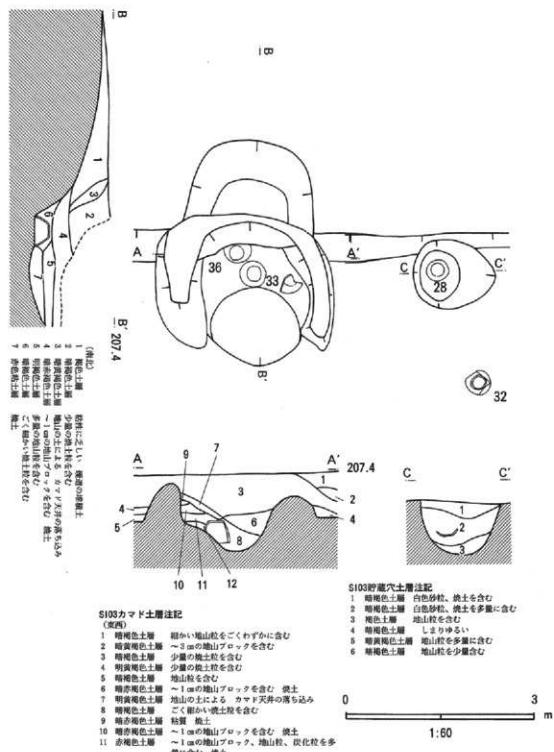


第8図 SI 03遺構実測図

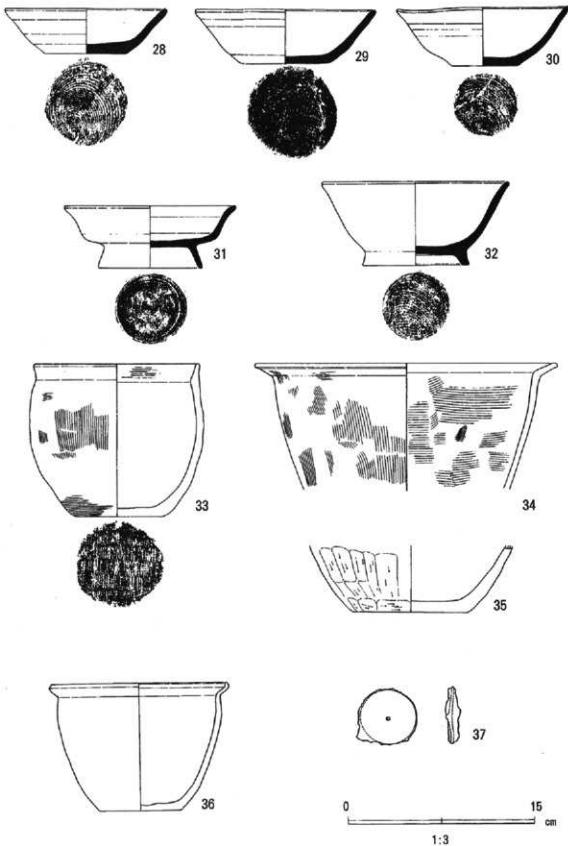
長さが90cm、幅が60cmで深さ30cmほどの圓丸の長方形のプランを持つ土壤があり、この覆土中から土師器甕の頸部(38)と底部(39)が出土した。貯蔵穴であろう。柱穴は小規模であり、主柱穴を識別するのは困難である。貯蔵穴以外からの出土遺物には、外に直線的に開く折り返しの口縁などがあるが図化不能でありこれら総量は1.12kgである。

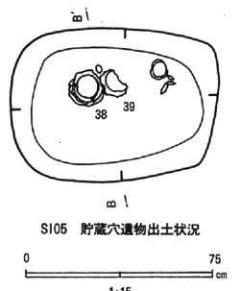
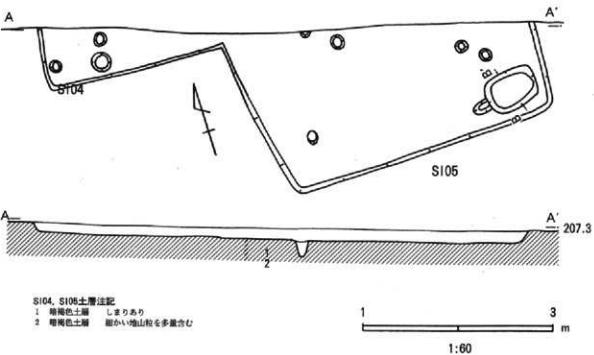
6号住居跡(SI 06) 第12図

C-1グリッドで検出された。北2/3ほどの検出である。主軸を決定する要素に欠けるが、仮に南北軸を主軸とした場合、その方位はN-3°-Wとなり、SI05とはほぼ同じになる。東西軸の長さは4.00mである。遺構の覆土は東半が地山のブロックが多量に混入する土で西半は暗褐色土の単層である。東半の土が入った経緯は不明であるが、その過程でもともとの遺構が破壊されたと考えるのは残されたプランを見るかぎりでは難しい。床面の判別



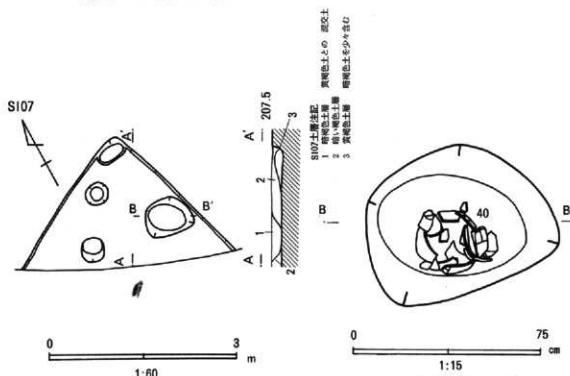
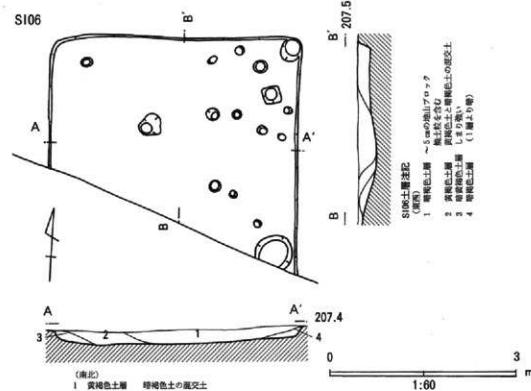
第9図 SI 03 カマド付近実測図



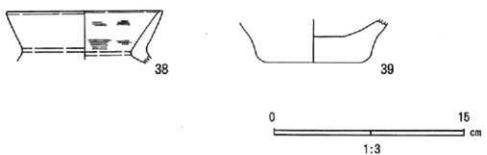


第11図 SI04, SI05遺構実測図

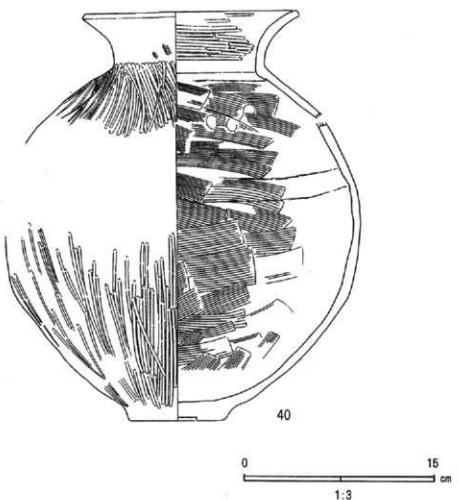
の壺(40)は外反する頸部と球形の胴部を持ち、口縁端部は外に向かって面を持つ。調整は胴部外面がタチミガキ、内面は口縁がヨコミガキで胴部がヨコハケである。この他わずかに土師器片が出土しており、その総量は0.1kgである。



第12図 SI06, SI07遺構実測図



第13図 SI05出土遺物実測図



第13図 SI07出土遺物実測図

2 溝 跡 第14図、第15図

調査区全域より4条の溝跡が確認されている。

1号溝跡(SD01)

調査区の西端、C-1グリッドで検出された。幅1m10cm、深さ50cmの箱堀の溝ではほぼ南北に直線的に延びる。覆土中より須恵器片が出土しており、有稜で底部ヘラケズリの壺(41)や外面に梯描き波状文が施された壺の口縁部(43)などがある。いずれも破片である。

2号溝跡(SD02)

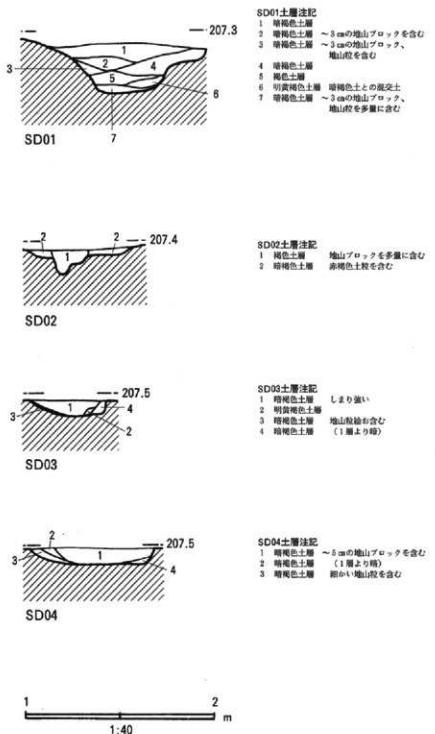
調査区の中央南側、C-4、C-5、C-6の各グリッドにまたがる。C-4グリッドの部分とC-5、D-5にまたがる部分に分かれており、西側が調査区外となっているが、全体の平面形は北東部が開いたC字状を呈すると考えられる。この溝の確認面での規模は、幅が50cmから1m10cm、深さは最深で15cmであり、底は凹凸がある。円弧の直径は最大で11mである。出土遺物は底部に糸切り痕の残る須恵器の壺(44)がある。

3号溝跡(SD03)

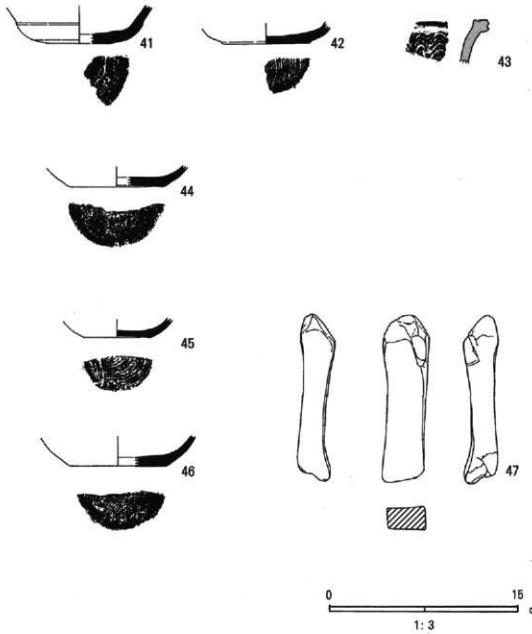
調査区の東側C-5からC-7グリッドにかけて確認された溝跡である。北西から南東に一直線に延び、調査区外へ続いている。確認面での規模は、幅が80cmから1m20cm、深さは平均して20cmほどである。出土遺物は須恵器では底部糸切りの壺(45,46)があり、土師器では長胴の甕の口縁部がある。また、磁石(47)が一点出土している。

4号溝跡(SD04)

C-6、D-7グリッドで検出された。幅1m30cm、深さ18cmで、南北に延びる。断面は浅い箱堀状で、底は平らであるが、所々に径20cmから3cmのピットがある。



第14図 SD断面図



第15図 SD出土遺物実測図

3 井戸跡 第16図

井戸の可能性の強い径3m強の土壌が2基検出されている。最下層までの確認にはいたらなかったが、規模や掘方の傾斜から、ここではこれらを井戸跡として扱いたい。

1号井戸跡(SE01)

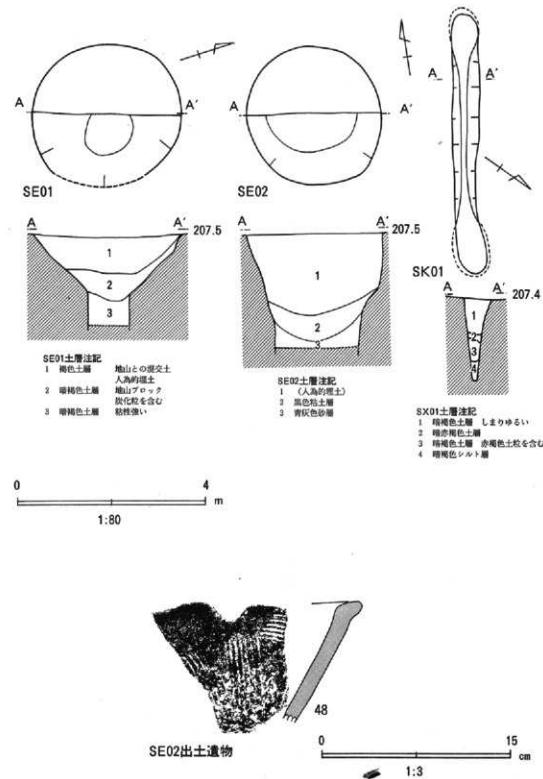
B-2、B-3グリッドで検出された。平面は径3.2mの円形である。確認面から1.2mの深さまでは人為的な埋土で、その下層が自然に堆積した層と考えられる。井戸枠などの施設は調査の及んだ範囲では認められなかった。遺物は、須恵器や中世陶器が人為的埋土から出土しているが、井戸の使用された時期は不明である。

2号井戸跡(SE02)

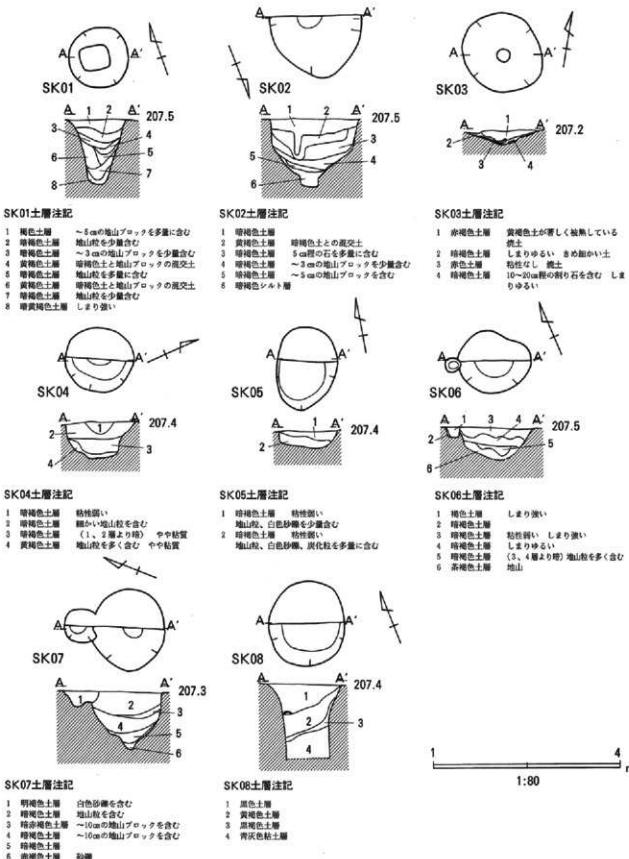
A-5グリッドで検出された。平面は径3mを測る円形で、掘方は一部に段を持つものの、急峻な角度を保ったまま確認面から2.4mの深さまで落ち込んでいる。上半は人為的な埋土で、遺物はこの中から摺鉢の破片が一片確認されたにすぎず、井戸が使用された時期の推定には至らない。なお、井戸枠の部分と考えられる木材片が2層より出土した。

4 土 壤(SK) 第17図

土壌は調査区域全域で確認されているが、このうち規模が比較的大きく、特徴的な要素を持つものを8基図示した。このうちSK02とSK08は、下層が耐水した痕跡が見られ、井戸跡の可能性も否定できない。SK02の出土遺物は底部糸切りの須恵器壊、近世の磁器などがあり、埋没過程の混入である。SK08の2層の上面からは廃棄された状態で茶臼の上白(63)が出土している。また、SK03は、径1.8mほどの平面円形の土壌で、断面は浅い摺り鉢状を底している。非常にきめの細かい焼土と暗褐色土の互層になっており、最下層の暗褐色土層からは中央付近に3個の割り石が確認されている。土器の出土は認められない。



第16図 SE01、SE02、SX01 遺構遺物実測図



第17図 SK01~8 遺構実測図

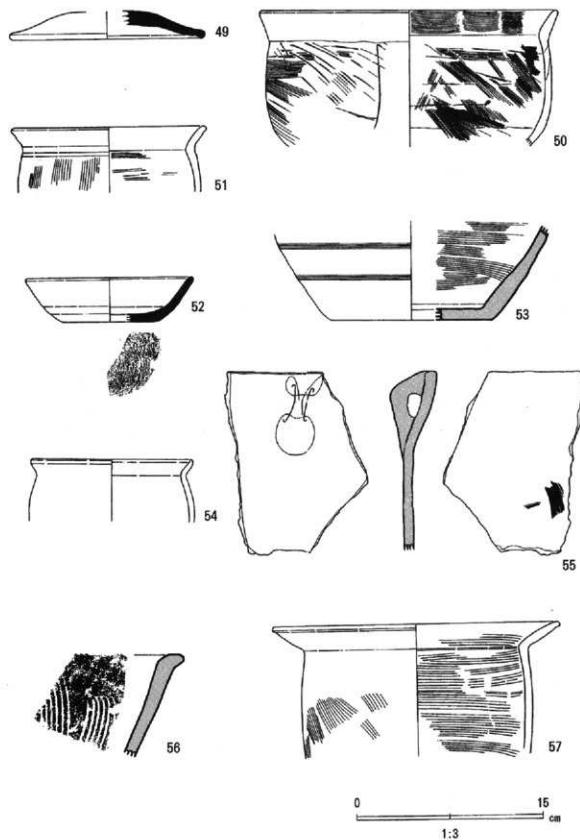
5 柱穴(SP) 第18図

柱穴も調査区全域で確認されている。遺構確認の段階で建物跡として確実に組むことができるものではなく、ここでの柱穴は、小規模の土壤も含めて便宜上の呼称である。遺物の出土したものは137箇所あり、出土遺物は、古代から中世の土師器、須恵器と土師質土器を中心である。

6 その他

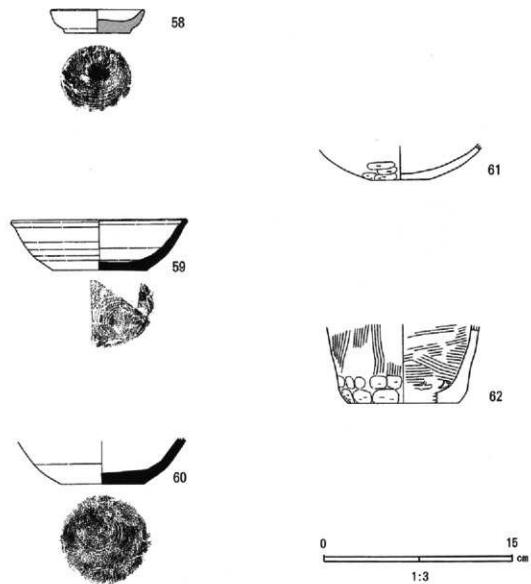
堀跡 第2図

調査区の北西角、A-1 グリッドから検出された。部分的な検出である。確認された箇所ではほぼ東西に延びており、幅は4.5m以上である。断面は緩い傾斜で落ち込み、確認面より 1m ほどの深さで段がつく。昭和29年の学校建築時までこの辺りに堀があったといい、上半はごく新しい土で埋め戻されていることからも、この溝が最終的に埋められたのは昭和29年と考えてよいだろう。一方、掘削の年代は定かではないが、明治初年の字寄図によれば、この付近が小字界となっていることがわかり、近世以前の堀跡であることは明らかで、戦国期に築城されたとされる治兵衛館にかかる堀跡と考えるのが適当であろう。



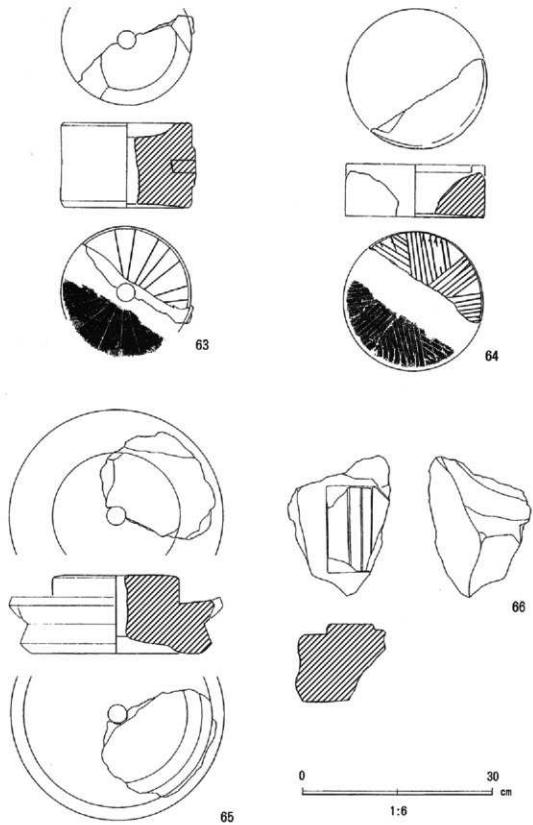
第18図 S-P出土遺跡実測図

- 32 -



第19図 鎮構外出土遺跡実測図

- 33 -



第20図 石製遺物実測図

V まとめ

今回の調査によって、治兵衛館遺跡からは古墳時代から中近世までの遺構と遺物が確認された。良好な一括資料が少なく断片的な資料からの記述となるが、各時代ごとの特色をまとめておきたい。

古墳時代の遺構としては、出土遺物から、SI01、SI02、SI05、SI07の計4軒の住居跡が確実なものとして把握できる。このうちSI02出土の器台(19)、SI07出土の壺(46)はプロポーションに古い要素を指摘することができ、古墳時代前期のものと考えられる。SI01からは、内面に稜を持つ丸底の壺が確認されており、壺の様相も合わせて南小泉式階段にあたる古墳時代中期のもので、住居にカマドが設置される直前のものとみられる。SI05については、少ない出土遺物からではあるがこの間に収まるものと考えておきたい。住居跡の切り合は、SI04とSI05で認められるが、明確な先後関係を指摘することはできなかった。このように、古墳時代には少なくとも前期から中期にかけての集落の変遷があったことになるが、遺構の密度は低く散発的で、維続的な変遷は、さらに大きな範囲内で遺構のまとまりを捉えて考える必要がある。

平安時代の遺構は、SI03の他に溝跡、一部の土壤と柱穴がある。これらの遺構からの出土遺物の主体は底部糸切りの須恵器坏で高台がともなうものがある。また、口縁が大きく外反する土師器壺も多い。SI03出土遺物の中には、口縁部が外反し、底部もへラ切りの後にへラケズリが施され高めの高台が付く須恵器(31)があり、他よりやや古い様相を指摘できるが、その他はほぼ9世紀前半でおさまるものと考えられる。住居跡はこれ一軒のみであるが、平安期の竪穴式住居としては川西町内で初めての確認となった。この他では円弧を描くSD02が9世紀の範囲で捉えられるようだが、集落との関係は不明である。

中世以降では、多くの土壤や柱穴と調査区北西の堀跡が該当すると考えられるが、陶器や土師質土器などの出土遺物は断片的に見られるだけで総量は少ない。その中で石臼(63～65)が少なくとも4個体土壤や井戸跡の埋め土から出土している点が特徴的である。治兵衛館に伴うものであろう。

これらを周辺の遺跡を背景として理解する場合、古墳時代の前半に一定期間存続する集落の存在は、これまで不明とされてきた周辺の古墳(群)の基盤となるものと理解することができる。また中世以降の遺構では堀跡など一部ではあるが治兵衛館に伴うと考えられるものが確認できた。館の範囲は、地形や字寄図、伝承などを考え合わせると、調査区の南を東西に走る堀と、今回確認された場所から南北に延びる堀に囲まれていた可能性が強い。近接する大塚城の出城として、最上川の浸食作用により残されたに舌状の地形を利用したものであっただろう。

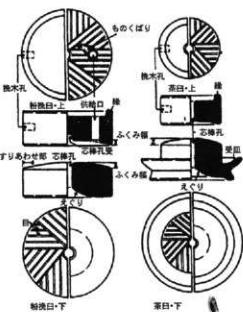
出土遺物計測表 () 内の値は復原値

図 No.	出土地	素材	器種	法量(cm)			備考 (注記No.)
				口縫径	器高	底径	
第4 図	1 SI01-C	土師器	甕	(12.4)			No.11
	2 SI01-B	土師器	甕	(18.4)			
	3 SI01-A	土師器	甕	(18.6)			No.9
	4 SI01-A	土師器	甕	(16.7)	19.2	6.0	No.10-No.12
	5 SI01-D	土師器	甕	(15.0)			No.6
	6 SI01-D	土師器	甕			6.8	No.4
	7 SI01-B	土師器	甕			(5.4)	No.8
	8 SI01-A	土師器	甕			(6.4)	No.3
	9 SI01-D	土師器	甕			7.2	No.13
	10 SI01-A	土玉	土玉	最大径3.5	最小径2.6		
第5 図	11 SI01-A	土玉	土玉	径2.4	穿孔径2.6		No.7
	12 SI01-C	土師器	甕	(11.8)	4.6		No.6
	13 SI01-D	土師器	甕	(13.6)	5.8		No.2
	14 SI01-A	土師器	甕	(13.2)	5.9		No.13
	15 SI01-C	土師器	碗	13.2	7.4	13.6	No.4
	16 SI01-A	土師器	甕	(15.2)	4.8		No.21
	17 SI01-B	須恵器	甕	(14.0)			
	18 SI01-B	須恵器	甕	(12.6)	3.4		No.6
	19 SI02-B	土師器	器台	(8.6)		12.0	
	20 SI02-B	土師器	片口鉢	(11.8)		5.5	No.1
第7 図	21 SI02-	土師器	甕			4.4	
	22 SI02-D	土師器	甕			9.0	
	23 SI02-C	土師器	鉢	19.5	14.1	7.3	No.1
	24 SI02-A	土師器	甕	14.8			No.3
	25 SI02-A	土師器	甕			6.2	No.1
	26 SI02-A	土師器	石				No.5
	27 SI02-A	土師器	?				
	28 SI03	須恵器	甕	13.1	3.7	6.7	No.5
	29 SI03	須恵器	甕	14.6	4.4	7.2	No.3
	30 SI03	須恵器	甕	13.8	4.7	5.2	
第10 図	31 SI03	須恵器	台付甕	13.8	5.0	8.4	No.1
	32 SI03-C	須恵器	台付甕	15.0	8.6	6.7	No.2
	33 SI03	土師器	甕	13.4	13.3	7.0	No.6
	34 SI03	土師器	甕	24.4			
	35 SI03-B	土師器	甕			9.2	
	36 SI03-B	土師器	甕	14.4	10.3	6.5	No.4
	37 SI03	鉢	円盤	4.4			16.9 g
	38 SI03	土師器	甕	(6.6)			
	39 SI05	土師器	甕			7.6	
	40 SI06	土師器	壺	17.3		7.8	28.3
第13 図	41 SI07	須恵器	甕			7.0	
	42 SD02	須恵器	甕			7.0	
	43 SD02	瓦質	擂鉢				
	44 SD03	須恵器	甕			(7.6)	
	45 SD04-3	須恵器	甕			5.4	

図 No.	出土地	素材	器種	法量(cm)			備考 (注記No.)
				口縫径	器高	底径	
第15 図	46 SD04-2	須恵器	甕			(7.8)	
	47 SD04-2	石	砥石	長さ13.6	中央幅3.1	中央厚1.8	
第16 図	48 SB02	瓦質	擂鉢				
	49 SP4	須恵器	甕	(12.6)			
第18 図	50 SP9	土師器	鉢	(24.0)			(22.9)
	51 SP20	土師器	甕	(15.6)			
第19 図	52 SP28	須恵器	甕	(13.4)	3.6	(7.6)	
	53 SP36	陶器	甕			(12.8)	
第20 図	54 SP38	土師器	甕	(13.0)			
	55 SP41	土師質	鉢				
第21 図	56 SP46	瓦質	擂鉢				
	57 SP77	土師器	甕	(23.0)			
第22 図	58 SP130	土師質	灯明皿	7.6	1.9	5.3	
	59 遺構外	須恵器	甕	(14.2)	4.1	7.6	
第23 図	60 遺構外	須恵器	环环			6.8	
	61 遺構外	土師器	皿			4.8	
第24 図	62 遺構外	土師器	甕			(8.8)	

石臼計測表

図 No.	出土地	種別	直徑	器高	縦幅			供給 径	心棒孔 長さ	ふく み幅	目 徑	挽木孔 深さ
					高さ	幅	ぐら					
63 SK08	粉挽臼・上臼	粉挽臼	(21.0)	(13.5)	2.5	2.3		(2.6)	0.6	鉢状	2.0	4.0
64 SP128	茶臼・上臼	茶臼	(22.3)						0.5	六角		
65 SP137	茶臼・下臼	茶臼	(12.5)		21.8	2.7		3.0	9.8	0.4		



石臼各部名称 (三輪 1983)

図版 1

報告書抄録

ふりがな	じへいたていせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	治兵衛館遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	川西町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	齊藤敏明							
編集機関	川西町教育委員会							
所在地	〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松1736-2							
発行年月日	平成11年3月							
ふりがな 所轄道路名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	道跡番号							
山形県東置賜郡 治兵衛館 川西町大学大塚 学元宿	6382			38度 2分 53秒	140度 4分 32秒	1998.06.15~ 1998.07.31	1,876	川西町立大塚幼稚園建設工事
所轄道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
治兵衛館	古墳時代 平安時代 城館跡	堅穴住居跡	5	土師器		最上川の河岸段丘に上に立地。古墳時代前期から中期の住居跡を5軒検出し、床面から土師器が出土した。 平安時代の住居跡、治兵衛館と呼ばれる城館址の掘跡を検出した。		
		堅穴住居跡 溝跡など	1	土師器、須恵器など				
	中・近世	掘跡 土壤など	1	石臼、擂鉢など				



治兵衛館遺跡遠景（北より）

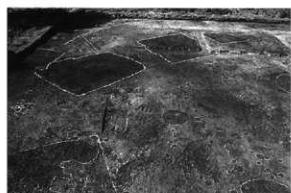


調査前状況（東より）

図版 2



遺構確認状況（西より）



SI01, SI02, SI03, SI06



SI03, SI04, SI05



SD02, SD03



SD03

図版 3



堀跡



堤防土層断面

图版 4



SI01



遗物出土状况



土层断面



贮藏穴



排水沟

图版 5



SI02



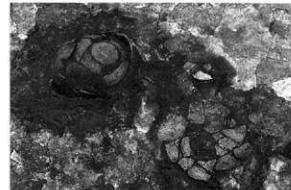
遗物出土状况



地床炉



排水沟



遗物 (23) 出土状况

図版 6



土層断面（南北）



土層断面（東西）



貯藏穴



遺物（31,37）出土状況

図版 7



SI03 カマド

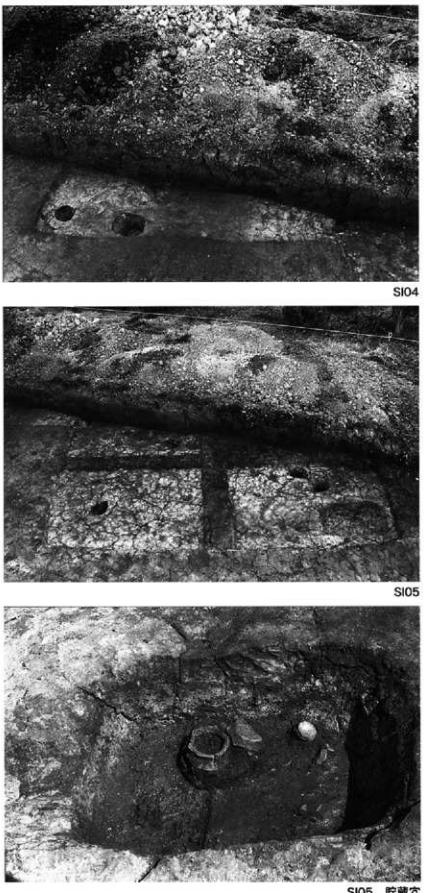


土層断面（南北）



土層断面（東西）

図版 8



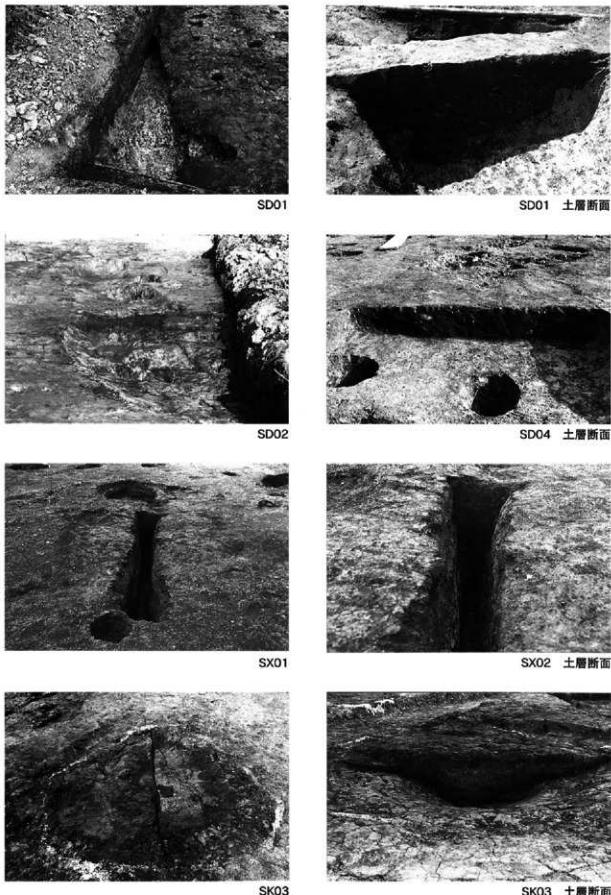
図版 9



图版 10



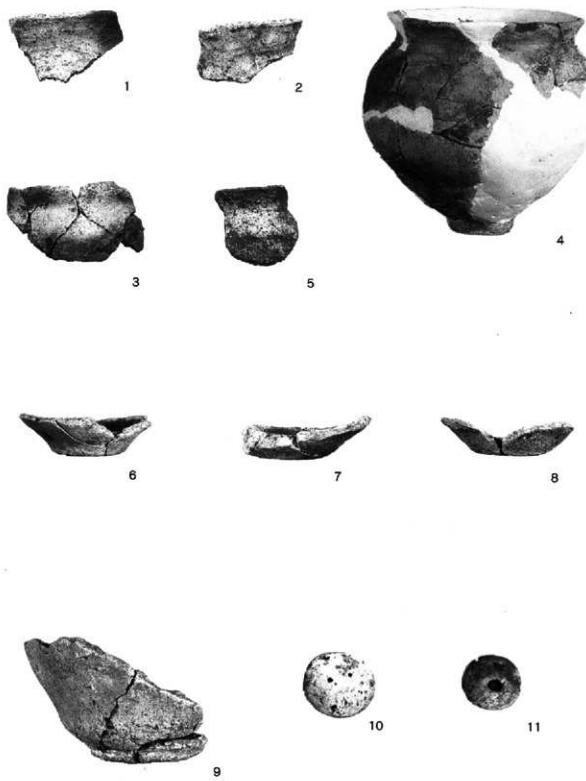
图版 11



図版 12



図版 13



図版 14



12



13



14



15



16



17

18



19



20

図版 15



21



22



25



23



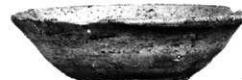
26



24



27

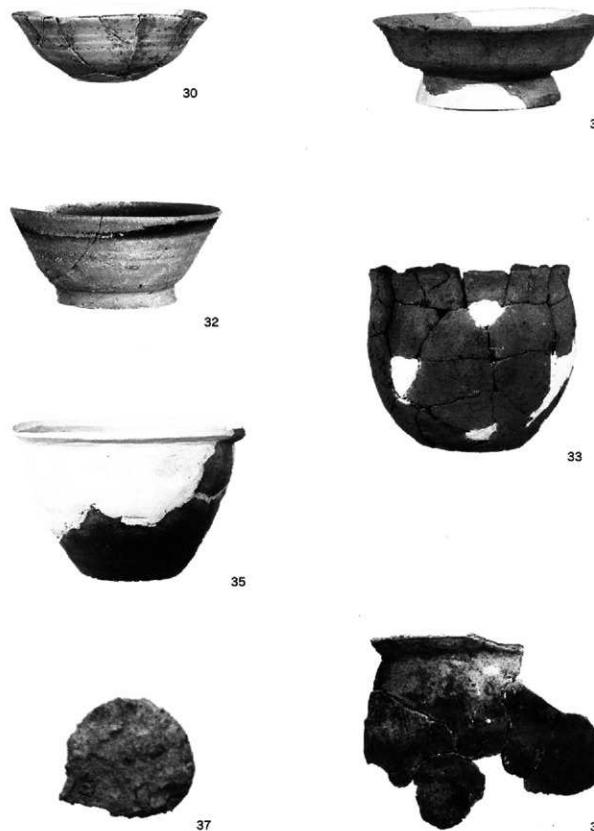


28



29

図版 16



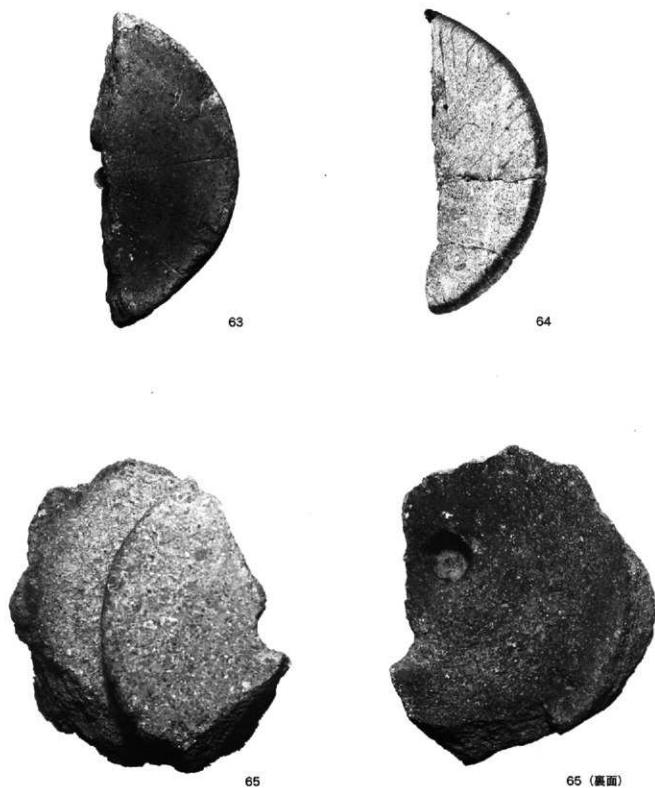
図版 17



図版 18



図版 19



治兵衛館遺跡発掘調査報告書

発行 平成11年3月

発行者 川西町教育委員会
山形県東置賜郡川西町1736-2
0238-42-2111

印刷 タカノ印刷有限会社